岩本由輝編『歴史としての東日本大震災　口碑伝承をおろそかにするなかれ』

岩間剛城

評者は日本経済史、その中でも特に地方金融史を専門としており、本書で取り扱われている震災史研究については門外漢である。しかしながら評者は、日本経済史・地方金融史の観点からではあるが、これまで宮城・福島両県を対象地域として研究を行ってきた。また、評者は平成二一年（二〇〇九）四月に近畿大学経済学部へ着任する直前まで、宮城県仙台市に在住していた。そのため、平成二三年（二〇一一）三月一一日に宮城県沖を震源として発生した東日本大震災は、個人的にも衝撃を受けた出来事であった。以上のような事情もあり、評者にとって専門外ではあるものの、あえてこの場をお借りして、東日本大震災に関する研究成果である、本書の内容紹介をさせていただきたい。

本書は、東日本大震災の被災地となった宮城県仙台市と多賀城市にキャンパスを有する、東北学院大学で研究を進めてきた四名の研究者によって執筆されたものである。東日本大震災以前から、東北地方に関する実証的研究を積み重ねてきた強みを生かしつつ、考察が行われている。

本書の章立ては、次の通りである。

第1章　400年目の烈震・大津波と東京電力福島第一原発の事故（岩本由輝）

第2章　仙台湾海底遺跡の発見と仙台平野を襲う大津波（貞観津波）について（河野幸夫）
第3章　失われた黒松林の歴史復元―仙台藩宮城郡の御舟入土手黒松・須賀黒松―（菊池慶子）
第4章　消防団体験から書き起こす東日本大震災―仙台平野にみる津波シミュレーションの功罪―（佐々木秀之）
第5章　口碑伝承をおろそかにするなかれ（岩本由輝）
むすびにかえて（岩本由輝）

以下では、各章の内容について概観していく。

第1章（岩本由輝執筆）ではまず、福島県浜通り地方が貞観一一年（八六九）発生の貞観津波における激甚地帯であったことを述べている。一〇〇〇年以上の歴史をさかのぼって検討してみると、宮城・岩手の沿岸部を中心とする三陸地方のみではなく、三陸地方以南の仙台平野や福島県浜通り地方も、大きな津波被害を受けていたのである。

続いて慶長一六年（一六一一）発生の慶長津波について、伊達政宗と探検航海家ビスカイノによる記録や、福島県相馬地方に残された口碑伝承を元に検討している。慶長津波に関する口碑伝承では、三陸リアス式海岸にとどまらず、相馬も含む福島県浜通り地方まで被害があったことが伝えられてきた。しかしながら、地震津波学者である渡辺偉夫により、過去の記録や口碑伝承は信憑性の疑わしいものとして津波の史料から排除され、慶長津波の矮小化が図られてしまった。郷土史家である飯沼勇義は、このような口碑伝承の軽視とは異なる立場から、仙台平野に津波が襲来する危険を東日本大震災発生以前に指摘していたが、行政には取り上げられなかった。

他方、日本原子力産業会議は昭和四五年（一九七〇）時点において、福島県浜通り地方において四〇〇年ぐらいごとに震度六以上の地震が起こることを認識していた。ただし、約四〇〇年に一度くらいの割合でしか起こっていないということで、原発の立地条件と

して差し支えない、としていた。そして昭和四六年（一九七一）には、東京電力株式会社によって福島原子力発電所（当時）の第一号機運転が開始された。しかしながら、慶長一六年（一六一一）の慶長津波からちょうど四〇〇年目の平成二三年（二〇一一）三月一一日に、地震と津波が東京電力福島第一原発を襲ったのであった。

さらに著者は、自身の体験も含め、原発事故前後の状況について言及している。福島県大熊町において「行政の下部機関として改組」された「部落組織」は、もはや本来の労働組織・生産組織としての共同体とは大きく異なっていた。このような「部落組織」の弱点を利用して、原発を設置する側が地元からの「原発誘致」を演出させたことを著者は指摘している。震災後、福島第一原発から放出された放射性物質は、農業者・漁業者の生業に大きな影響を及ぼし続けている。

評者が東日本大震災発生直前まで思い込んでいた、津波は三陸地方、リアス式海岸のもの、という考えは、過去の歴史的経験から見ても誤りであったことを、本章から学ぶことができた。また著者は本章において、東北大学で日本経済史を研究していた中村吉治の共同体論を踏まえつつ、原発立地に至った福島県大熊町の状況について検討している。著者の議論の背景には、東京電力株式会社による地元軽視の対応とは対極の、地域社会に生きる人々への確かなまなざしがある、と評者は感じた。

第2章（河野幸夫執筆）では、電磁波・地電流の変化から地震の予測を進めている工学者の立場から、仙台湾海底遺跡の調査と貞観津波についての考察がなされている。著者による潜水調査の結果、宮城県七ヶ浜町の約一〇キロメートル沖合にある「大根堆」の水深一〇～一五メートルに、東大根大明神の祠と考えられる人工物などが点在していることが確認された。これは、かつてあった島が地震と津波で海中に沈んでしまったとする、地元の言い伝えと一致するものと考えられる。

著者は続いて、海底調査の結果を元に島が一〇～一五メートル陥没したとして、貞観津波のシミュレー

ションを行った結果を示している。貞観一一年（八六九）に宮城県にマグニチュード八・三前後の大地震が発生し、波高一〇メートル前後の大津波が仙台平野を襲ったことは、事実と考えられる。また、約一〇〇〇年に一度ずつ大津波は繰り返されており、すでに一〇〇〇年は過ぎて、いつ来てもおかしくない時期に入ってしまった。

以上は平成一二年（二〇〇〇）時点で著者が得ていた結論であったが、平成二三年（二〇一一）三月一一日に発生した東日本大震災の状況を一〇年以上前に予測した内容となっており、評者にとっては驚きであった。このような警鐘に対して、行政などからの反応が無かったのは、東日本大震災発生後の今となっては惜しまれるところである。

第3章（菊池慶子執筆）では、宮城県沿岸のうち仙台市宮城野区中野・蒲生・岡田地区を取り上げて、黒松の植林が開始された歴史を、仙台藩政の時代に焦点を絞り明らかにしている。仙台平野が稲作地帯に転換する基礎となったのが海岸林の造成事業であり、その歴史はおよそ三五〇年前、御船入土手黒松と須賀黒松の植林に始まった。黒松の植林は内陸の農地と集落の潮害防備、および新田開発の進展に大きな役割を果たした。

明治維新後には、植林面積は拡大されることとなった。しかし潮害防備保安林が御舟入土手黒松のほか、ほとんど造成されずに来たことが、蒲生地区を手薄な状態とし、東日本大震災の際には大きな犠牲につながった。仙台市宮城野区沿岸部の海岸林は、東日本大震災により、壊滅的な被害を受けることとなったのである。

日本経済史研究においては、戦国時代から江戸時代前期にかけて、国内各地で土木開発・新田開発が進められたとされている。また近世流通史に関連して、仙台平野で生産された米が船で江戸に運ばれていたことが指摘されている。評者もこれらの点は、ある程度承知していたが、本章では江戸時代前期における仙台平野の開発に際しての、仙台藩による植林の意義が強調されており、興味深い内容であった。

第4章（佐々木秀之執筆）は、震災直後の消防団体験を基にした、震災の状況についての記録である。評者が宮城県仙台市出身という事もあるが、著者が従事した、震災直後の仙台港近辺における緊迫した救命活動の状況が、本章の叙述からは具体的に伝わってきた。本章で紹介されている仙台市宮城野区蒲生地区の高橋實和田町内会長への聞き取りなどと合わせて、このような非常時の活動に関わった当事者の証言は、後世に伝えられるべき貴重な情報を含んだものである。

ただし、本章の著者は日本経済史研究者であるため、本章の内容は震災直後における実践活動の記録にとどまるものではない。著者は地域に残された津波の伝承についても考察を加えた上で、仙台平野における歴史津波は貞観津波だけではなく、約四〇〇年前の慶長津波の被害も甚大であったことを指摘している。

著者は加えて、震災前後の津波シミュレーションの問題性についても言及している。東日本大震災が発生する直前においては、コンピューターの数値解析による津波シミュレーション研究が主流となっていくにつれ、古文書や伝承などに基づく研究・提言はないがしろにされてしまった。歴史津波である貞観津波と慶長津波が考慮されなかった結果、津波被害の予測は過小評価されてしまったのである。さらに東日本大震災発生後も、津波シミュレーション結果が復興計画に影響を与え、そのことが被災地住民を翻弄している状況が示されている。

第5章（岩本由輝執筆）では、まず『理科年表』における津波の記述について確認している。『理科年表』の記述の推移を見ると、特に一九八〇年代後半以降に、慶長津波や明和八重山津波の記述が矮小化されていった。このことは、口碑伝承とみなすものを「科学的でない」として否定的に扱い排除することにもつながったのである。『理科年表』による歴史地震・津波についての矮小化された記事ではなく、福島県浜通り地方にも津波の襲来があったことを示した口碑伝承を尊重していれば、東京電力福島第一原発事故の発生時に連発された「想定外」は全く成り立たないことになる。著者は、「口碑伝承をおろそかにするなかれ」と

述べ、仙台湾岸地域や福島県浜通り地方での地震・津波の発生可能性を退けた、地震津波研究者や東京電力株式会社などを批判している。

著者はさらに、関西電力高浜原発から四～六キロメートル以内に、地すべりを起こしやすく建物を建てることは避けたほうがいいと言われていた地層があることを、伊木常誠「福井県若狭国大飯郡内浦村変動地調査報告」（『震災予防調査会報告』第二一号、一八九八年七月）を引用しつつ紹介している。

最初に本書を目にしたとき、評者は題名に軽い違和感を覚えた。現在においても、東日本大震災による多くの被災者は、厳しい生活状況に直面している。このような現状からして、東日本大震災直後の約二年間の状況を歴史として取り扱うには、時期としてまだ早いのではないか、と評者は思ったのである。しかしながら本書を通読して、評者が抱いた当初の誤解は解消した。本書は、古文書や口碑伝承などから得られる情報を元にして、平安時代以降に発生した過去の歴史地震・津波の状況を丹念に確認した上で、東日本大震災を歴史的に位置づけようとするものであった。

本書は震災史の観点から、過去と現在をつなごうとする、貴重な試みである。また本書では、自然科学の「客観性」に対する異議申し立てがなされるとともに、先人の残した口碑伝承を丹念に検討することの重要性が指摘されている。「震災研究」というと、自然科学者が中心となる印象があるが、人文科学や社会科学、とりわけ歴史学や民俗学からも学問的な貢献がなしうるということを、評者は本書から学ばされた。

将来の震災について考えるという意味からも、本書で行われた、過去の震災に関する口碑伝承を確認する作業は、多くの研究者によって日本国内各地で継続的に実施されるべきであろう。本誌『民俗文化』前号（第二五号）では、東日本大震災の被災地を対象地とした民俗調査の報告が特集されたが、過去の震災に関する民俗調査が、今後は西日本各地でも行われることを、評者としては期待する次第である。

東日本大震災から三年余りを経て、震災が風化して

きている感は否めない。評者は東北地方への出張の際に、現地で連日のように流れる震災関連報道を見聞して、震災関連報道が減少しつつある関東以西との「温度差」を実感させられることがある。本書でなされた震災史に関する考察は、東日本大震災を直接現地で経験した東北地方の在住者にとどまらず、今後の大地震・大津波発生が想定されている関東以西の在住者にも、真摯に受け止められるべきであろう。

（刀水書房、二〇一三年、二一六頁）